NANJING INTERNATIONAL PEACE NEWSLETTER
南京国際和平簡訊
南京国際平和通信
54
April 2024 Issue 54

ヘッドライン

清明節：欠席のできない追悼式

清明節前日の4月3日、南京は小雨に見舞われた。南京大虐殺犠牲者清明祭が当館の嘆きの壁の前で行われた。 南京大虐殺の幸存者、遺族、日本の友人、各国の学生代表ら60人以上が参列し、厳かな雰囲気の中で犠牲者を追悼した。

日本友人の松岡環さんは1988年以来、南京大虐殺の真相を広めるために尽力してきた。参列する彼女は「侵略戦争と南京大虐殺の過ちを繰り返してはならない。悲しい歴史をより多くの人々に伝え、平和を祈る活動を続けなければならない」と語った。

歴史の記憶を語り継ぐ者には、若い人たちが増えている。バングラデシュ、イラン、イエメン、アフガニスタンらの国からの留学生たちは、幸存者の子孫や中国人留学生と対面した。異なる国籍にも関わらず、彼らはこの歴史に同じ思いを持っている。

受け継ぐ

最後の手紙

4月2日は南京光華門で戦死した殷安華将軍の誕生日である。
盧溝橋事件の後、1937年8月10日の夜、殷将軍は部隊を率いて上海戦線に向かった際、新妻に宛んで別れの手紙を妻に送った。手紙に「不滅後世、誓不生還（国将不亡、我以家為）殷妻作之」（後世を滅ぼしない限り生還しないと誓い、国を保たなければ家を持つこともできぬ。我が妻よ、これぐ手紙、気持ちを指す＞を受けとってくれ）と書いている。

1937年11月、上海の陥落を受け、中国軍は南京に撤退した。12月から南京城の防衛戦が始まり、殷将軍は光華門、通済門一帯の陣地を構えた。12月12日、光華門陣地右翼の雨花台陣地と左翼の中山門陣地は相次ぐ突破されたため、光華門陣地は三方から攻撃を受けることになった。激戦の中、殷将軍は部と右腕を重傷した。部下たちは何度も彼を陣地から運び出そうとしたが、彼は「私は中国の軍人だ。日国民に失望させて一人で生き残ることを許さない。己の生死は井上の生死、陣地の存亡と共にするのだ」と語り、最後の戦闘で敵軍から発の砲弾を受け、城壁から砲に落下し、37歳でこくなった。

当館SNS「Nanjing Memorial」にフォローしてください

3月中旬から4月上旬は紫金草の開花シーズンになる。 FacebookとTwitter（X）のアカウント「Nanjing Memorial」で、外国人見学者に平和の花を楽しんでもらおうとのメッセージを発信したところ、ネットユーザーから「いいね」「企画してくれてありがとう」などのメッセージが多数寄せられた。これからもフォローしてくださいね。

心の声

世界中からもっと多くの人が記念館に来てほしい

4月6日の朝、元在中国ドイツ大使のフォルカー・シュタンツェル（Dr. Volker Stanzel）博士が当館を訪れ、展示館の続びの所にある「平和の壁」の前で長い間立ち止まっていた。「ここに来ると、とても悲しく思う。世界中のもっと多くの人々がここに来て、見てほしい」と語った。

イタリア人エンジニアのアンドレアさんは訪問後、「南京大虐殺については以前から知っており、それは人類史上の残酷な暴行だ。これらの彫刻を見ると、とても悲しい気持ちになる。記念館は戦争の歴史と残酷さを実感できる所、とても意義のある場所だ」と話した。

ニュージーランドから来た青年ノーマンさんは、アイリス・チャンの銅像の前でたちまって写真を撮っていた。「アイリスの本を読み、南京大虐殺の歴史を知ってもらった。平和は誰にとっても尊いものだと思うと語った。

ドイツのディーターフルト市長が当館を訪問

4月14日、ドイツのディーターフルト市市長ベルント・マイヤー（Bernd Mayr）が率いる約50人の代表団が当館を訪れた。

周峰館長の案内で来賓が「南京大虐殺定実展」を見学した。ドイツ人のジョン・ラーベ氏の銅像の前で、周館長がラーベ氏と南京市民との間に80年以上にわたる友誼を紹介し、ラーベ氏の彫刻、墓碑、日記の前で来賓が長い間立ち尽くしていた。

また、ドイツ人のカール・ギュンター氏は当時、江南セメント工場を保護し、デンマーク人のベルンハルト・シンドベーグ氏と共に難民区を設立し、2万人以上の中国人難民を保護した。

ベルント・マイヤー市長は「記念館を訪れたのは今回が初めて、以前は学生時代に南京大虐殺の歴史を学んだことがあった。今回の訪問で、最も強く感じたのは二つがある。一つは歴史を忘れてはいけないということ、もう一つは、この世で同じような出来事が繰り返されないようにすることだと話した。市長はまた、南京大虐殺の際に南京の難民を救護したドイツ人ジョン・ラーベとカール・ギュンターの義挙を誇りに思うと語り、多くの若者が当館を訪れていることに感銘を受けた。「帰国したら、もっと多くの人にこの歴史を紹介したい。今回、中国に来て、姉妹都市である南京市を訪れた。今後は南京の友人をドイツに招待し、イベントを共同開催し、相互理解を深めたいとも思っている」と語った。

ドイツのバイエルン州中央部のアトムタ自然公園内に位置するディーターフルト市は、「ヨーロッパ初の中国人街」として知られ、その歴史は中世にまで遡る。第二次世界大戦後、同市の住民はバイエルンの「中国人」として国際的に知られるようになり、2015年には南京の雨花台区と姉妹都市関係を結んだ。